

### 『キューティ・ブロンド』

2001年／アメリカ／ロバート・ルケティック監督作品

#### 自分らしく、前向きに。

会員 深澤 美希 (74期)

ブロンド美女のエルは、政治家を志望する恋人のワーナーに「ブロンド女性は議員の妻にふさわしくない」という理由で振られてしまう。ワーナーが、ハーバード大学のロースクールに進学するつもりであることを知ったエルは、ワーナーとの関係を復活させるため、ハーバードを受験し、弁護士になることを決める。エルは猛勉強に励み、無事、ハーバードに合格。そして、在学中の努力と活躍により、ワーナーよりもずっと優秀な成績でロースクールを卒業する。卒業式の日、ワーナーは、「やはり君は僕にふさわしい」と復縁を求めてくるが、そのころのエルには、ワーナーよりもずっと素敵なパートナーがおり、ワーナーはあっさり振られてしまう。こんなお話。

エルは、明るく元気でおしゃれが大好きな大学生。大学ではファッション・ビジネスを専攻しており、「デルタ・ヌー」という社交界クラブの代表を務めている。いつも全身をブランド物で固め、女子学生カーストの頂点に君臨している女の子。友人からの信頼も厚く、みんなの憧れの的。そんな、法学とは180度違う世界で活躍していたエルが、果敢に法学の世界に挑むのだ。

映画のメインは、ハーバードの教授が自分の担当する殺人事件の助手として、エルを起用する場面。エルは、被告人が、「デルタ・ヌー」の先輩であることに気づき、彼女が殺人などするはずがないと確信。全力で弁護に励む。そして、映画の最大の見どころは、エルがファッションの知識を駆使して、証人の供述の嘘を暴くシーン。これまでのエルの経験と知識が最大

限に発揮される。全身ショッキングピンクのスーツで証人を追い込むエルの姿に、拍手喝采の私。

この映画の原題は、「Legally Blonde」。アメリカでは、「Blonde」は、セクシーだけど知的ではない、というような、少し差別的な意味を持つ（らしい）。そして、「Legally」とは、合法的な、法律的な、という意味。原題には、エルが法律家を目指しているという意味が含まれるのだろうが、女性（特に、ブロンド女性）への偏見に対する抗議の意味もあるのではないかと思う。ロースクール入学当初、「おいおい、なんだ、あのバカそうな女は」と思われていたエルは、誰よりも立派に事件を解決し、優秀な成績で卒業する。エルは法律家としての信念も、ファッションリーダーとしての信念もずっと曲げない。ずっとエルはキュートで、情熱的で、立派な法律家。

今見ても、全身ピンクのエルはかわいい。この映画を初めて観た時、私は教育学部の学生だったが、司法試験にチャレンジしたくなったのを覚えている。司法試験受験生といえば、『キテレツ大百科』の「勉三さん」みたいなイメージしかなかったけれど、こんな素敵な受験生もいるのね、それなら私もトライしてみたい、と思った。あれからだいぶ時間が経ち、改めてこの映画を見返してみたが、エル流の「自由と正義」が満載で、元気が出る映画だなあとしみじみ思う。「女性の外見と内面」「法曹としての資質」「法曹の多様性」など、この映画が投げかけるテーマはたくさんある。これから弁護士を目指す人にも、ベテランの弁護士の方々にもおすすめしたい一本である。